京都大学	博士（文学）	氏名	黄　沈黙
論文題目	泰順蛮講方言研究		

（論文内容の要旨）

本研究は、浙江省の南端に位置する泰順県で話される「蛮講」という方言の調査報告及び言語体系の分析である。筆者は、閩語と呉語の境界地域に位置する蛮講の方言特徴を究明することを目標とし、2016年から2020年にかけて前後十回以上実地に方言調査を行った。本論文では、1929年生まれと1942年生まれの二人の発話協力者から得られた調査結果が主たる資料となる。この一次資料に基づき、蛮講の音韻体系の分析、歴史的音韻特徴の考察、さらに語彙と文法に関する記述が本論文の骨子となる。

本論文は以下の全五章からなる。

第1章「序論」は6節に分かれる。蛮講を研究対象とする目的及び本論文を通して明らかにしようとする問題について述べた第1節「研究目的」を冒頭に置く。ついで、第2節「泰順概況」は、泰順県の歴史沿革、地理位置と行政区画等の基本情報を紹介する。第3節「泰順方言概説」は、呉・閩両方言境界線に位置する泰順県内の各種方言分布状況を説明し、本研究ではその中の泗溪で話される蛮講を主たる記述対象とすることを説明する。第4節「先行研究」は、蛮講を主な考察対象とした研究以外に、閩語・閩東方言の先行研究の中に蛮講と深く関わるものについても紹介する。第5節では、主に方言調査の過程及び発話協力者の基本情報を紹介する。第6節は「凡例」であり、本文におけるデータの表記や例文の掲出形式等、さらに例文中に出現頻度の高い語彙の一部について説明する。

第2章「音韻体系」は、主な研究対象たる泗溪蛮講の音韻体系の全貌を示す。

第1節「声母」と第2節「韻母」および第3節「単字調」では、一次資料に基づいて蛮講の音韻体系に対する分析と整理を行い、声母20種と韻母47種と声調7種に帰納し、国際音声記号表記による記述を行った。第4節は、音節表により蛮講における声母・韻母・声調の結合関係を示す。第5節は、蛮講において特徴的な振る舞いを見せるu介音について述べる。まず蛮講におけるu介音の存在状況を整理し、次に、声母fに後続するu介音を音韻的視点と歴史的音韻変化の視点の両方から考察し、蛮講におけるf声母の成立にu介音がどのような作用をもたらしたかについて分析を試みた。その結果、f声母はp声母またはp^h声母から変化したものではなく、軟口蓋x声母にu介音が後続する環境下において出現した過程が明らかになった。第6節と第7節はそれぞれ蛮講の二字組の連読変調と三字組の連読変調について論じる。蛮講には二字、三字で構成される語彙において、単字調の声調調値とは異なる調値が出現し、そこには基本的な変調規則を帰納し得ることについて実例に則し分析し、規則Aとして記述した。基本的な変調規

則から外れた多音節組も多く存在するが、一定の規則性が見出せるものについてさらに分析を加え、規則Bを帰納した。また、同じ造語構造の二字・三字組で変調規則が異なる現象を指摘した。第8節では蛮講に見られる規則的な文白異読をまとめた。蛮講には、より口語的で日常的な語彙に現れる白読と、より文語的な語彙に現れる文読の対立が広く観察できる。本節では、中古音との対応規則に基づき、原則的な文白異読の特徴を記述した。

第3章「歴史的音韻特徴」は、歴史的音韻論の角度から蛮講の音韻体系を考察し分析する。

第1節は、中古音と蛮講の音韻対応を声母・韻母・声調に分けて記述する。韻母ではまず多数を占める主要な対応規則を表によって示し、次に中古音の韻母グループである十六摂に沿って対応関係を詳述する。第2節は、歴史的音韻特徴から観察する蛮講と閩方言の関係について論じる。まずは閩方言共通の特徴とされる項目について蛮講での状況を確認し、蛮講が閩方言としての分類特徴を十分に満たしていることを明らかにした。次に、さらに焦点を絞り、閩方言の中でも閩東方言の特徴とされる項目について、蛮講の音韻特徴との間の相関関係を分析した。その結果、多くの点で蛮講は閩東方言に一致するが、閩東方言では説明できない音韻特徴も幾つか観察されることが明らかとなった。それらは、周辺の他方言、主として呉語の影響を受けたものであると考えられ、それについても推論を記した。第3節「蛮講の特筆すべき音韻特徴」では主に二つの特徴について分析する。一つは、中古入声字の一部が去声で読まれる現象についてである。この特徴が閩東方言内でいかなる現れ方をするかを確認した結果、当該現象を有する中古入声字の単字音、特に声調が、連読変調の前字として声調変化を起こす時、いかなる本字調であっても全て去声の変調規則に従うという点で一致することを見出した。さらにその要因として、連読変調において入声韻尾の脱落が上述の現象の第一段階として認められることを指摘したが、これは本論文の成果の一つである。もう一つは、中古遇摂字韻母の非円唇化現象である。この特徴は蛮講以外の閩東方言にはほぼ見られないため、ほかの閩東方言から区別できる特徴と従来主張されているが、筆者が調査した雅陽という地域の蛮講には当該の特徴が見られず、依然として円唇母音で発音される。一方、雅陽におけるこれらの字は、他の地域の蛮講と異なる韻母で読まれるにも関わらず、止摂開口の精組・荘組声母字と同韻母として合流する特徴は共通して観察される。これらの現象の分析を通して、本論文では止摂開口韻と合流するという変化の趨勢が、蛮講の多数地域における中古遇摂字韻母の非円唇化現象を促したという仮説を提示する。第4節では、泗渓・洲嶺・筱村・雅陽四地点の蛮講に見られる内部差異について論述する。まずは尖音と団音の合流状況に関して、四地点の中でも呉語通行地域に最も近い筱村で話される蛮講ではすでに尖音と団音が完全に合流していることさらに、閩南方言通行地域に近い雅陽では、韻母に他の三地点とは異なる特徴が多く見られることを指摘し、その主な違いを記述した。以上、第3

章では、蛮講には閩方言的特徴が圧倒的に優勢ではありながら、地域間格差も少なからず見られることを明らかにした。

第4章「語彙」は3節に分けて蛮講の語彙について述べる。

第1節「閉じた類」とは、所属語の数が限られ、しかも単語群内には変化が少ないものを指すが、使用頻度も高く重要な文法機能を持つ語が多く含まれる。この「閉じた類」は、以下7つの部分からなる。（1）介詞：常用される介詞9種について例文を示しつつ紹介する。（2）方位詞：単純方位詞と合成方位詞を示し、両者の区別及び方位詞の文法機能について論じる。（3）位置詞：場所詞の中で、事物の相対的位置を示す機能を有するものを位置詞とし、例示する。（4）時間詞：時間の名称と相対的な時間名詞。（5）代名詞：人称代名詞・指示代名詞・疑問代名詞を示す。（6）数詞：基数詞、特に二十以上の数字の言い方について例を示しながら説明する。（7）量詞：当該方言に特徴的な量詞を提示する。第2節「基礎語彙」では、蛮講の基礎語彙を閩東方言の福州方言、呉語甌江方言の温州方言と比較する。比較の結果、蛮講が福州方言と共通する語は温州方言と共通する語に比べて多いことが明らかとなった。第3節「特徴詞」は、先行研究で閩語の方言特徴詞と看做される語について、蛮講での使用状況を確認し、両者の異同をそれぞれ記述する。方言特徴詞とは当該の方言には用いられるが、ほかの方言特に標準語にはあまり見られない語のことであるが、これら語彙の分析を通し、蛮講は、音韻的特徴のみならず語彙の面においても、閩語と密接な関係を有することを明らかにした。

第5章「文法」は全て13節からなり、内容的には形態論的特徴と統語論的特徴両方を含む。

第1節「語構成」は四つの部分に分かれる。第一部分では、まず蛮講の語構成の原則は標準漢語とほぼ同じであることを略述した上で、語順が標準漢語と異なる語の代表例を示す。続く第二部分「接頭辞」と第三部分「接尾辞」では、蛮講の接頭辞3種「洋・阿・老」と接尾辞3種「依・師・頭」について記述する。第四部分「指小辞」は、蛮講の代表的な指小辞「囝kiɛ^{55}」の意味機能を5種類に帰納し、それぞれ用例を列挙し、用法上の特徴を述べる。第2節「人称代名詞」は人称代名詞以外に、人称名詞の複数表現に対しても分析を加えた。第3節「指示詞と指量名構造」では、はじめに、蛮講の指示詞の体系を指示範疇によってまとめた。次に、近称「这tɕi55」と遠称「许ɕy55」が単独で使われる状況と範囲について記述した。続いて、蛮講の量名構造には定指の機能がないことを用例を示しつつ述べ、最後に、量詞「个kɔi^{52}」が文末に置かれる時の特殊な用法について分析した。第4節「所有」では、まず蛮講における標準漢語の「的」に対応する助詞「其ke0」の文法機能を説明し、続いて所有・所属関係を表す修飾構造について論じた。第5節「存在」では、蛮講の存在表現について、（1）動詞「有」を使うタイプ（2）「有+ヒト/モノ＋動詞＋许」タイプの二類が存在することを指摘し、それぞれのタイプについて例文を提示しつつ解説を加えた。第6節「受動」で

は、動詞に後続する文成分の分類に沿って受動表現を論じた。また受動マーカーの介詞「乞kʰɛʔ⁵」を有する受動文には動作主を省略することはできないという特徴を特に取り出して論じた。第7節「処置」は処置文を考察し記述した。蛮講の処置文では介詞「把pa⁵⁵」によって目的語を前置させ、そして述語動詞の後に付加成分が付くのは、標準漢語と同じである。「把」の後ろに場所を表す名詞が続く場合はあるが、場所名詞だけでは「把」の目的語になれない点は特徴的である。第8節「使役」では蛮講の使役表現について、強制・指示の使役では「□εu52（標準漢語の「叫」に相当する）」が使われるのに対し、許可の使役表現には「乞」が用いられることを述べる。第9節では「二重目的語」を有する動詞及び構文を分析対象とする。構文については、介詞「乞」を通して間接目的語を導くタイプと動詞自体が二つの目的語を持ち得るタイプについてそれぞれ例文を示し、さらに語順と動詞「借」に関する注意点を説明した。第10節は「否定」表現にまつわる論述である。蛮講の否定詞は次のように分類できる：①不 ŋ33、②未 muɔi33（「没有」）、③无 mo31（「没有」）、④莫 mo33（「別」）、⑤□乐 m-ma33（「不要」）、⑥□ mei33（「不能・不会」）。蛮講の否定表現に関しては興味深い現象が多く観察される。例えば、標準漢語の「没有」に相当する否定詞は後続の語が動詞か名詞かによって未か无になること。また、「不要」に対応する否定詞「□乐」に関して、「乐（要）」の前の否定は「不」ではなく、鼻音m から始まるものとなること等について記述を行った。第11節「疑問」では蛮講の疑問文を6種に分類して記述する。蛮講における疑問の表し方について、標準漢語と大いに異なる点として、文末に否定詞が置かれるタイプが疑問文の表現として優勢であることが挙げられる。また、同「特定疑問文」では、問う対象（人・物事・理由・数量・時間・方法など）ごとに疑問詞を分類し、それぞれについて具体的に例文を示しながら記述した。第12節「比較」では、比較表現を「差がある」、「同等・類似」、「最上級」という比較の効果によって大別し、それぞれの表現のしかたに対して分析を加えた。第13節「アスペクト」では、例文を挙げながら完結・開始・進行・経験・実験等のアスペクト形式について説明した。

付録「同音字表」・「語彙表」

同音字表は、韻母47種、声母20種、声調7種の順に配列する。対応する漢字表記が特定できない単音節形態素には、用例や注記を加える。

語彙表は調査で収集した約3000語彙を収める。配列は、調査に用いたプリンストン大学中国言語学研究プロジェクト作成のHandbook of Chinese Dialect Vocabularyに従い、27類に分類する。標準漢語で記す見出しに続いて、蛮講語彙の漢字表記及び国際音声字母表記を示し、必要に応じて一部の項目に補足説明を加える。さらに、調査票には収録されていないが、常用される語及び蛮講としての語彙特徴をよく示すと見なしうる語には、別に番号を付して採録した。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、浙江省最南端に位置し、福建省と境界を接する泰順県にて話される「蛮講」と呼ばれる方言の調査研究である。論者は、泰順県の泗渓・洲嶺・筱村・雅陽各鎮にて方言調査を実施し、その中の泗渓を中心に、音韻・語彙・文法の各項目ごとに詳細な記述を行い、さらに他の三鎮の言語現象を加味して、歴史的、また地理的側面から綿密な分析を行った。本論文は、泰順県蛮講方言に関しての、最初の全面的な研究成果と言うことができる。論者の当該地域における方言調査は2016年から始まり、足かけ5年間、10回以上現地に赴き、繰り返し調査と確認を実施した。途中、実地調査が困難な時期もあったが、すべて現地でデータ収集と確認作業を行うという方針を貫くことができたのは、論者が調査過程において発話協力者に信頼され良好な関係を築いた結果に由来し、同時に資料の信頼性をも担保するものである。

蛮講方言は、その音韻特徴に基づき、隣接する福建省北部で話される閩東方言の一つであるとの指摘が従来行われてきた。論者は、当該地域北部には呉語麗衢片を用いる地域が分布し、さらに福建省南部からの移民による閩南方言島にも隣接するなど、同方言が境界的な言語環境に位置することを考慮し、先入観に囚われない地道な記述態度を貫く。その結果、調査対象である泗渓蛮講方言が閩東方言の一つと見なしうることを、音韻のみならず語彙の面からも立証するに到った。これは本論文の大きな成果である。以下、論文の内容に即して特筆すべき点を述べる。

第1章序論に続く第2章は、泗渓蛮講方言の音韻体系を詳細に記述する。まず、泗渓蛮講方言の音韻特徴は、全体としては閩東方言的特徴を備えながらも、声母の音価の一部、さらに陰入声調値が陽調より高く発音される点からは、呉語の影響がうかがえることを指摘する。また、第6節及び第7節では二音節、三音節からなる語の連読変調について、豊富な語彙資料に基づき考察を加える。それにより、従来知られていた二音節変調規則に合致しない変調例にも、語構成の特徴により一定の法則性が存在することを示した。それに加えて、三音節語の連読変調規則を解明したのも、本研究の大きな貢献と言うことができる。

第3章では、当該方言の音韻特徴を中国語中古音の体系に照らし、その対応関係を論じる。中でも、中古入声字の一部に単字調で去声に合流する文字が存在し、連読変調時において入声韻尾が脱落し去声調への合流が観察され、それが単字調の調値にも影響した可能性があること、さらに止摂開口韻の精組・荘組声母字の一部が遇摂韻所属字と合流し、両者が非円唇母音で発音される現象が存在すること、それと平行して、近隣の雅陽蛮講方言では両者が同じ条件下で母音uで発音される現象を示し、同じ蛮講内で非円唇化と円唇化という双方向の現象が生じていることを指摘した点は、興味深い。この現象が生じる機制についてはまだ分析を深める余地は有るものの、複数方言の境界に位置する言語の多様性を示す現象の指摘として大きな意義を有する。

第4章は、泗渓蛮講方言の語彙について記述する。その基礎となるのは、本人が丹念

に収集した約3000にも及ぶ語彙データである。この語彙データは付録三に全語がリストアップされるが、リストには、IPA、英語訳のみならず、用法上の注意点や類義語の注記、またその語彙を用いた俗語表現なども記述され、充実した内容を誇る。付録二の同音字表と併せて、今後、当該方言を研究する上での基礎資料となり得るものである。これらのデータから、「閉じた類」「基礎語彙」「（方言）特徴詞」としての分析に必要な語彙をピックアップし、まず呉語温州方言及び閩東語福州方言との間で基礎語彙の比較対照を行った結果、泗渓蛮講方言の示す特徴が呉語よりも閩東語に近似することを論証した。その基礎の上で、先行研究において閩語方言特徴詞と認定される200語のうち128語までが、泗渓蛮講方言でも一般的に用いられることを明らかにした。調査の過程で3000語の語彙を記述した論者の分析は、この点において大きな説得力を有する。

最終章の第5章文法では、第1節の語構成から第13節のアスペクトまで、主たる文法機能について、基礎的な記述を行う。泗渓蛮講方言の文法に関してはまとまった報告が存在しないため、各節の内容はすべて貴重な一次報告と見なすことができる。なかでも、判断動詞「是sɛi^{33}」が主たる動詞となる所有文においてのみ量詞「个kɔi^{52}」が文末に出現すること、さらに存在文で文末に現れる「许ɕy^{55}」、持続を表すアスペクト助詞の「许ɕy^{55}」など、歴史文法との関連を想起させる興味深い現象も、多く指摘される。

以上、本論文で明らかとなった蛮講方言の境界的性格は、共時的観点からは言語地理学や社会言語学に対す大きな貢献と見なしうると同時に、今後、閩語内部の系統関係を明らかにする上でも、貴重な研究成果として参照されることが期待される。

このように優れた調査報告と分析結果を有する本論文ではあるが、いくつか積み残された問題も存在する。本論文では当該言語の帰属を明確にする必要から閩東語との比較対照に力を注ぐこととなったが、実際の言語現象を明らかにするには、隣接する呉語地域で話される諸方言との比較が必要である。また、音韻・語彙の調査分析に比べて、文法面の記述がやや平面的な段階に止まっており、分析を深める為には、歴史文法からのアプローチも求められよう。しかし、これらの問題点は、ちょうど論者がさらなる調査を計画していた時機と渡航・移動制限が布かれた時機が重なり、持てる資料内で可能な分析を進めることを余儀なくされたという制約によるものであり、近い将来、方言調査を再開できる条件が整えば、より豊富な言語データに基づき、新たな知見を示してくれるに違いない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和4年2月18日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。